

京極読書新聞 <第102号>

発行日 令和元年7月23日(火)
京極町生涯学習センター湧学館

京中生に インタビュー



平成29年度第28回京極町読書感想文コンクールで入選した中学生に、読んだ本のことや学校生活についてなどをお聞きしました。

今の中学生はどんな本を読んでいるのでしょうか？

二階 優人さん 3年「あなたの人生を、誰かと比べなくてもいい」
守 藍さん 3年「サラとソロモン」



「あなたの人生を、誰かと比べなくてもいい」五木寛之／著（PHP研究所，2017）
「サラとソロモン 少女サラが賢いふくろうソロモンから学んだ幸せの秘訣」
エスター・ヒックスほか／著（ナチュラルスピリット，2005）

- 二階さんは、どうしてこの本を選んだのですか。
- 二階 ちょうど悩んでいたことがあって、その答えがあるかなと思い選びました。
- この本で印象に残った言葉があるそうですね。
- 二階 「人は本来ひとりである。死の瞬間にそばに誰がいようとしまいと、ひとりで旅立つのだ。」という言葉です。
- 二階さんと作者の考え方に違いがあると感じたそうですね。
- 二階 自分はマイナス思考なので、作者のプラス思考を見習いたいと思いました。
- 二階さんは今までに人と自分を比べたことがありますか。
- 二階 他の方ができることが自分にはできないと、ネガティブに考えたことがありました。
- この本を読んで全体としてどんな感想を持ちましたか。
- 二階 自分の意見を大切にしようということと、他の人の意見も聞いて、自分なりに取り込むことが大事だと思いました。
- 今までに読んだ本の中で、一番面白かった本は何ですか。
- 二階 あまり本は読まないんですが、そのなかで第一印象で目に入ってきたこの本が面白かったです。
- これまでの学校生活で、一番心に残っているのはどんなことですか。
- 二階 文化祭で劇のキャストを演じたことです。
- 守さんがこの「サラとソロモン」を選んだきっかけは何ですか。
- 守 女の子が空を飛んでいる表紙が印象的でしたし、内容も気に入りました。
- 主人公のサラがふくろうのソロモンに出会ったことで、サラに何か変化がありましたか。
- 守 サラは最初おとなしい性格でしたが、ソロモンと出会ったことで、明るくポジティブになりました。
- 守さんがサラと考えが似ていると思ったそうですが、どういうところですか。
- 守 自分が考えていることが変わるだけで、気分がよくなったり悪くなったりするところです。
- この本で印象に残った言葉があるそうですね。
- 守 「苦しみの鎖」という言葉です。他人にいやなことをされて、自分が仕返しをするのもっといやな気分になり、お互いが傷つき苦しみが続くということだと思います。
- この本をどんな人たちに読んでもらいたいですか。
- 守 物事をすぐ悪くとらえてしまう人や、ネガティブに考える人に読んでもらいたいです。
- この本以外で面白かったのは何ですか。
- 守 小学生の時読んだ「あらいぐまラスカル」です。
- これまでの学校生活で、一番心に残っているのはどんなことですか。
- 守 体育大会と札幌にいった宿泊研修です。



建礼門院右京大夫が見た平家の人々

——素顔の貴公子たち——(その2)

<『平家物語』を読む会> 村山 功一

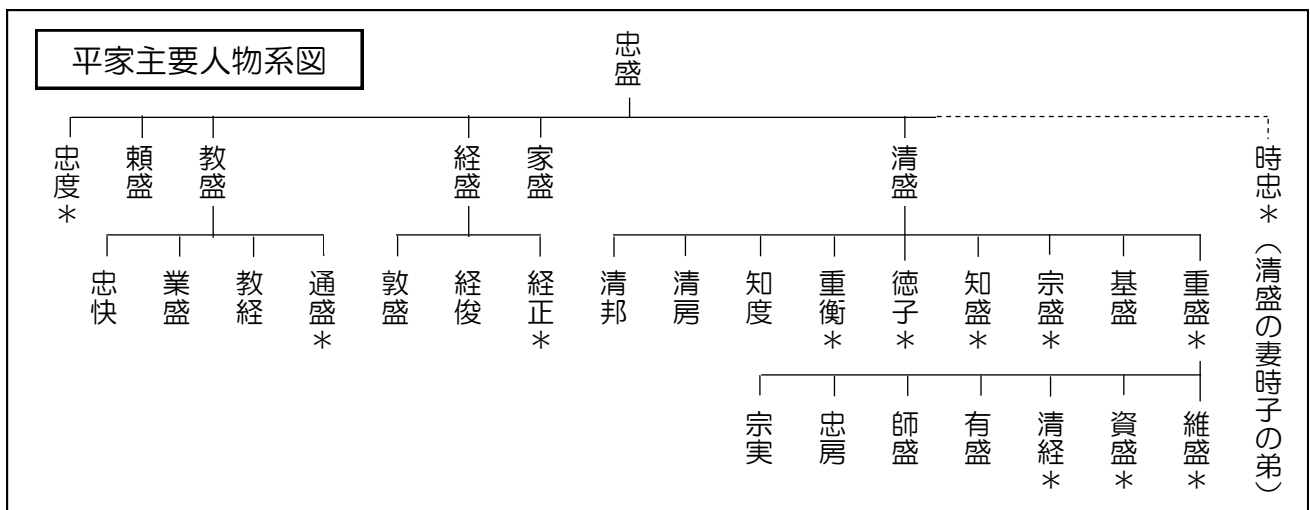
平家一門との交流

《右京大夫》が出仕した当時平家は全盛期にあり『平家物語』（以下『平家』と略記）は「～すべて一門の公卿十六人、殿上人卅（三十）余人、諸国の受領、衛府、諸司、都合六十余人なり」（巻一「吾身栄花」）と書いています。一門の誉れである中宮徳子の周辺には“武家貴族”という新しいタイプの貴公子たちが平家文化と呼ぶにふさわしい洗練された“中宮的文化圏”を作り上げていました。こうした優美で華やかな世界に身を置くことになった《右京大夫》は、その幸せと誇らしさを存分に味わったはずで

す。歌集では「序」に続く第一番目に、承安四(1174)年正月元日に高倉天皇、中宮がお揃いのところに伺候した《右京大夫》は、お二人の姿を <まるで太陽と月を同時に見る思いがする> とその輝くばかりの美しさに感嘆し、その場にいる自分を <わが身のめぐり合わせが、こんなにも嬉しい> と率直な喜びを記しています。そのわずか十数年後、大原「寂光院」で見ると影もなく落ちぶれやつれ果てた中宮（作者退仕後の養老元[1181]年、中宮徳子は院号を賜り建礼門院と称する）と再会することになるろうとは、この時は知るすべもありません。

それはともかく、作者はこうして始まった女房生活五年間に、親しく交流した一門の人々とその素顔に触れていきます。

系図は平家一門の主要な人物だけを示したものです。名前の下に*印を付けた人物が《右京大夫》が親しく接した平家の人々です。



素顔の貴公子たち (1) 維盛 (これもり)



承安四(1174)年四月、賀茂神社の祭礼の頃と《右京大夫》は回想します。中宮がお住まいになる「藤壺」で世間話をしている時、ちょうど維盛が通りかかました。その華やかな衣装と、加茂の祭警護の凛々しい姿を見て <まるで絵入り物語の中の人物のようだ> と感嘆しています。維盛の優雅で美しい容姿については『平家』や『平家公達草紙』などにも見え、多くの伝承も残されています。特に有名なのは、安元二(1176)年、法住寺殿で催された後白河院の五十歳の御賀(祝賀会)で青海波(せいがいは=舞曲の名)を舞う、その華麗さでした。

これについて《右京大夫》は歌集の後半、維盛入水の報を聞き詞書に次のように記します。 <平家の公達はどなたも今の世間は見当たらない、本当にすぐれた方々でしたが維盛の中将は、その容姿、お心遣いなど、今の世の人々とは比べものにならないほど、すばらしい方でした> と述べ、続けて <後白河院五十のお祝いに、青海波を舞った折には「光源氏の例を思い出させるほど」と人々が申しおりましたし「中将様の美しさは、桜の花の美しさも圧倒されてしまいそうだ」と申したほどでした。これまで親しんだ一門の方々が亡くなられた悲しさは、どなたもみな同じですが、維盛様の場合はやはり格別に思われます> と、その死を惜しんでいます。

維盛はまた舞のほかに笛も巧みだったようで、歌集中に何カ所かその様子が描かれています。 <(毎年)内侍所(ないしどころ=三種の神器の一つ八咫鏡を安置した御殿)の神楽の折(維盛が笛を)たいそう趣深く吹いていらっしまったことも思い出される> と回想し、また中宮が実家である西八条邸(清盛の別邸)を訪れた際、経正(系図参照のこと)が琵琶を弾き維盛が笛を奏で、女房たちが琴を合奏した様子が述べられています。

舞と笛が得意であった維盛ですが、歌を詠むことは苦手だったようです。西八条邸での管弦の遊びのあと、みんなで歌を詠み合うことになったとき <「自分のように歌など詠むことのできない者はどうしよう」とおっしゃったが、なお周囲から催促されて> しぶしぶ一首詠んだと書かれています。

このように見てくると維盛の“美貌”“華麗な舞姿”という人物像は、単なる伝説ではないことが分かります。

また、維盛は度々《右京大夫》に <自分のことを弟(《右京大夫》の恋人資盛)と同じように思っしてほしい> と言っていたとあります。こう言われて《右京大夫》は困惑し複雑な気持ちになったことでしょう。これなど、維盛という人物の実像の一端を示しているようで、興味深い話です。この話は『平家』には書かれていません。『平家』の描く維盛は、あくまでも“悲劇の貴公子”として扱われています。

画像出典

「ビジュアル源平1000人」(世界文化社, 2011)

維盛(これもり)… 118ページより

重衡(しげひら)… 32ページより

(2) 重衡 (しげひら)



維盛の叔父に当たる重衡ですが年齢は二歳しか違いません。二人は一門を代表する貴公子で、『平家』ではく平家はもとより代々の歌人才人達で候也。先年此の人々を花にたとえ候しに、この三位中将（重衡）をば牡丹の花にたとえて候ひぞかし>（巻十「千手前」）という逸話を載せています。『平家公達草紙』にも全く同様の記述があることから、維盛に並ぶ美貌・優美という人物像が定着していたようです。また『平家』は、数々の合戦に軍勢を率いて奮戦する優れた指揮官としての姿を描き、文武兼備の理想的な武家貴族としての重衡も描いています。

『右京大夫集』では容姿、風貌については書かれていません。作者の視点は重衡の人柄に向けられます。彼はよく中宮の御座所にやって来て、気軽に世間話をしたり、冗談を言って女房たちを笑わせたり、怪談話をして怖がらせたりしたことが述べられています。後年、一の谷の合戦で捕虜となり都を引き回された時には、深い同情とともに昔の姿を思い出し <むかし親しかった人々の中でも（重衡は）、特に朝夕お馴染みで冗談などを言い、またちょっとしたことでも他人のためには都合のいいように心遣いをしてくださったりして、まれにみる良いお方でしたのに>と回想しています。気さくで快活な好青年として重衡を捉えています。

その重衡もまた、維盛と同様 <私のことを資盛と同じように思ってください>と常々言っていたとあります。でもこれは“恋の告白”といった深刻なものではなく、資盛との仲を知りながら、ちょっとからかっているように見受けられます。《右京大夫》もまた <あなたの言葉を頼みにしたいけれど、あてにはなりませんからね>と、軽く受け流しています。一門を代表する二人の美青年維盛、重衡とのこうしたやりとりを、明るく楽しんでいる《右京大夫》の姿を読み取ることができます。

◆維盛と重衡

『平家』には平家一門についての逸話がたくさん描かれていますが、特に清盛の孫維盛と清盛の四男（一説に五男）重衡については、独立した“維盛物語”“重衡物語”と呼んでいいほどのまとまった章段を設けています。一の谷の合戦で捕虜となつてなお、毅然とした態度を崩さず、身に付けた優雅さを保ち続けた重衡。断ち切れぬ妻子への思いから一門を離脱し、葛藤と苦悩を続けた末に那智の海に身を投じた維盛。『平家』の作者は、この二人の貴公子に深い同情を寄せながら、虚構も交えつつ美しく描いています。



ビジュアル源平1000人
(一般書 281.0ビジ)

▲ 平安時代から幕末・明治まで時代をリードした源平ゆかりの人物が大集合。ドラマティックなエピソードを通じて歴史を楽しむ入門書。

* 【『平家』の関連章段】

維盛…巻五「富士川」、巻七「維盛都落」、巻十「横笛」「高野巻」「維盛出家」
「熊野参詣」「維盛入水」

重衡…巻五「奈良炎上」、巻九「重衡生捕」、巻十「内裏女房」「戒文」「海道下」
「干手前」、巻十一「重衡被斬」

* 『平家公達草紙』（へいけきんだちぞうし）

平家公達の逸話を集めた絵入り草紙。『右京大夫集』や『平家』に酷似する部分も多いため、早くからその関連が指摘されているが、はっきりしたことは分からない。一説に建礼門院の妹を妻とする藤原隆房の関与が想像されている。隆房もまた親しく中宮の許に出入りしたのはもちろん、隆房夫妻は壇の浦から連れ戻された建礼門院のその後の生活の支援に尽力したという（角田文衛『平家後抄』講談社学術文庫）。こうした間柄から、この草紙の成立に隆房が関わった可能性も否定できない。

なお参考のため、系図で*印のある人々の生、没年を示しておきます。これには異説もありますが、ここでは『平家物語大事典』により年齢順に示しました。

- ・時忠〔ときただ〕 大治五(1130)年生、文治五(1189)年没
- ・重盛〔しげもり〕 保延四(1138)年生、治承三(1179)年没
- ・忠度〔ただのり〕 天養元(1144)年生、寿永三(1184)年没
- ・宗盛〔むねもり〕 久安三(1147)年生、元暦二(1185)年没
- ・知盛〔とももり〕 仁平二(1152)年生、元暦二(1185)年没
- ・徳子〔とくこ〕 久寿二(1155)年生、貞応二(1223)年没？ 諸説あり
- ・重衡〔しげひら〕 保元二(1157)年生、元暦二(1185)年没
- ・維盛〔これもり〕 平治元(1159)年生？ 寿永三(1184)年没
- ・資盛〔すけもり〕 応保元(1161)年生、元暦二(1185)年没
- ・清経〔きよつね〕 長寛元(1163)年生？ 寿永二(1183)年没
- ・通盛〔みちもり〕 生年未詳 寿永三(1184)年没
- ・経正〔つねまさ〕 生年未詳 寿永三(1184)年没

◆ 《右京大夫》 仁平二(1152)年生と推定されるも未詳。没年も未詳。

◆ 同じ年に元号が三つ！

1185年は元号が三つになります。

- | | |
|--------|------------------|
| ① 寿永四年 | } なぜ、こんなことになるのか？ |
| ② 元暦二年 | |
| ③ 文治元年 | |



平家は都落ちの際、安徳天皇を奉じます。天皇不在となった都では、後白河院の命により後鳥羽天皇（安徳帝の異母弟）が即位し、元号を「元暦」に改めます(1184)。平家はこれを認めず「寿永」を継続しました。壇の浦合戦が行われとき、平家側では寿永四年、源氏側では元暦二年としています。同じ年の八月十四日には改元があり文治元年となりました。その結果三つの元号が並ぶことになったのです。

小幡 穂花さん 3年「私のスポットライト」
中川 和香さん 2年「ハッピーノート」
松本 姫和さん 2年「わさびちゃんとひまわりの季節」



「私のスポットライト」林真理子／著（ポプラ社，2016）

「ハッピーノート」草野たき／著（福音館書店，2005）

「わさびちゃんとひまわりの季節」たざわりいこ／著（小学館，2014）

—— 小幡さんはどうしてこの本を選んだのですか。

小幡 表紙の絵がかわいらしくて読んでみようと思いました。

—— どのような内容なんですか。

小幡 ごく普通で平凡な女の子彩希が、文化祭のクラスの劇で、押しつけられて主役をやることになったんですが、だんだん演じるのが楽しくなり、自信を持ち始める物語です。

—— 小幡さんは主人公の彩希と同じくらいの年齢ですが、自分と似ているところがありますか。

小幡 親に口答えしてすぐケンカになるところです。

—— 違うと思うところはありますか。

小幡 彩希は自分が平凡だと思っていますが、私は活発な方なのでそこが違うように思います。

—— この本を読む前と後では、気持ちに何か変化がありましたか。

小幡 この本を読んだ後に、クラスの間には、それぞれのスポットライトが当たる場所があるんだと思うようになりました。当時、学級委員長だったんですが、みんなの個性が生かせればいいなと思いました。

—— 今までに読んだ本の中で、一番面白かった本は何ですか。

小幡 この本が面白かったです。

—— これまでの学校生活で、一番心に残っているのはどんなことですか。

小幡 体育大会で学年リレーに出場したことです。

—— 中川さんはどうしてこの本を選んだのですか。

中川 この主人公が私と同じ6年生だったからです。

—— どのような物語なんですか。

中川 小学校でも塾でも自分らしくいられない聡子が、友だちとの関係の中で、成長していくお話です。

—— この本を読んで心に残ったことは、どんなところですか。

中川 聡子が周りの人にとらわれずに、自分の意志をもって生活していくところです。

—— 作者が伝えたかったことは何だと思いますか。

中川 夢に向かって努力した人は必ず報われるということです。

—— 今までの中学校生活で、印象に残っていることは何ですか。

中川 入学式の時、新入生の代表に選ばれて、入学の言葉を述べたことです。

—— 今までに読んだ本の中で、一番面白かった本は何ですか。

中川 小学校の時に読んだ「ヘレン・ケラー」です。

—— 松本さんはどうしてこの本を選んだのですか。

松本 実際、テレビなどで話題になったからです。

—— どんなお話なんですか。

松本 カラスに襲われて怪我をした子猫を、

家族で保護してくらしていく物語です。

—— 子猫のわさびについて、どう思いましたか。

松本 生後間もない子猫なのに、いろんな苦しさによくとえたと思いました。

—— わさびが天国へ旅立った時、一緒にくらしていた犬のポンズの様子はどうでしたか。

松本 わさびに寄りそって、「どうしたんだろう」という寂しそうな様子でした。

—— このポンズについてどう思いましたか。

松本 ずっとわさびを見守り続けて、えらいと思いました。

—— 作者が伝えたかったことは何だと思いますか。

松本 命がどれだけ大切なのか、友だちがどれだけ大切なのかだと思います。

—— 今までに読んだ本の中で、一番面白かった本は何ですか。

松本 「こむぎといつまでも」という本です。これも猫のお話です。

—— これまでの中学校生活で、印象に残っていることは何ですか。

松本 球技大会でバスケットボールの試合に出場したことです。

発行

京極町生涯学習センター湧学館
〒044-0101 京極町字京極158番地1
TEL 0136-42-2700(代表)
FAX 0136-42-2032
E-Mail yugakukan@town-kyogoku.jp



ホームページもご覧ください
<http://lib-kyogoku.jp>

